小林市シムシティ課
KOBAYASHI CITY DEPARTMENT OF SIMCITY BUILDIT
３学年でつないだ まちづくりのバトン

「高校生が考える理想のまち」が生駒高原に生んだ新たな名所

小林市を代表する観光地生駒高原に新たな名所「人間日時計展望台」が設置され、9月26日（土曜）にオープニングセレモニーが開催されました。

この展望台は、平成30年度から市と小林秀峰高校が取り組んできた、スマートフォン向け都市経営シミュレーションゲーム「シムシティビルドイット」（以下シムシティ）を活用してまちづくりを考える取り組み「シムシティ課」の集大成。

新燃岳の噴火などにより観光客が減少する生駒高原を盛り上げたいと、小林秀峰高校の商業科・経営情報科の3年生有志が3年にわたり研究・活動した成果として完成しました。

高校生に親しみやすい形でまちづくりに取り組んでもらうことを目的としてきた「シムシティ課」。

今回は、これまでの歩みや、活動に携わった高校生たちの想いをお届けします。

㊤展望台は生駒高原全体と小林のまちが一望できる絶景スポット ㊦足跡マークに立つと影で時刻が分かる

火山活動に苦しむ生駒高原を盛り上げたい高校生がふるさとに向き合った３年間

ゲームを使って理想のまちを考える

１年目はシムシティを活用して理想のまちをシミュレート。小林の魅力を再発見するとともに、理想と現実のギャップを考察し、そのギャップを埋めるためのアイデアをレポートにまとめて発表しました。

さまざまなアイデアがあふれる発表のなかで一番の高評価だったのが「生駒高原映え増え栄え大作戦」。活発な火山活動で観光客の減少に苦しむ生駒高原を、若者に人気の写真投稿アプリ「インスタグラム」映えするスポットをつくって盛り上げるというアイデアでした。

クラウドファンディングで資金を調達

先輩たちのアイデアを後輩28人が継承。市内観光地の現地視察やワークショップなどをとおしてアイデアを磨きあげました。

アイデアを実現するための費用を調達するため、ふるさと納税制度を活用したクラウドファンディングにも挑戦。10月にはクラウドファンディングの告知を兼ねて生駒高原でイベントを開催し、心を込めたおもてなしで来場者を歓迎しました。

結果として、ふるさとを盛り上げたいという高校生の活動に賛同した多くの人から、170万円以上の寄付が集まりました。

高校生の想いがついに形に！

３年目は、先輩たちのアイデアを受け継いで、38人が活動。

今年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で学校が休校になるなど、活動時間がなかなか確保できない事態に。

しかし、少ない時間のなかで日時計のデザインを検討し、先輩から受け継いだアイデアを「人間日時計展望台」として完成させました。

9月26日には、生駒高原のコスモスまつりに合わせてオープニングセレモニーが開催され、来場者にお披露目されました。

小林秀峰高校
平成30年度卒業生
永崎綾菜さん

×

小林秀峰高校
経営情報科3年
今奈良遥花さん

×

小林秀峰高校
令和元年度卒業生
松山佳聖さん

今年で3年目を迎えたシムシティ課。先輩から後輩へ受け継ぎ工夫を重ねてきたアイデアが「人間日時計展望台」として実を結んだ今、各学年で中心となって活動してきた平成30年度卒業生の永崎綾菜さん、令和元年度卒業生の松山佳聖さん、現3年生の今奈良遥花さんの3人に、シムシティ課のこれまでの歩みを振り返ってもらいました。

―1年目はシムシティを使ってまちづくりを考えました。ゲームでまちづくりと聞いて感じたことは

永崎　学校はスマホの持ち込み禁止だったので、授業でゲームしていいの？という気持ちでした。

それに、ゲームからどうやって現実のまちづくりにつなげるんだろうと疑問に思いました。

―普通の授業とは一風変わった授業でした

永崎　小林のまちをどう活性化させるのかという身近なテーマだったので、楽しかったし好きな授業でした。私は勉強が苦手だったので、他の授業の方が大変でしたね（笑）

―実際に活動して発見したことは

永崎　小林のいいところをたくさん知りました。例えば、小林は人がいいとか、水がとても綺麗で、だからその水を使ってつくる野菜もおいしいんだとか、今まで知らなかった発見がありました。

―一番思い出に残っていることはなんですか

永崎　最初にイメージムービーを撮影したことが思い出に残っています。

私たちの代は、先輩たちがNOBUさんと一緒につくった「田舎女子高生」（※）のミュージックビデオを見てきました。今度は自分たちが出演した動画が後輩につながっていくんだと思うとうれしかったです。

シムシティ課のイメージムービーは現在も動画サイトYoutubeで視聴できる

※小林秀峰高校は平成29年度に小林出身アーティストNOBUとコラボ。6チームに分かれて作詞に挑戦し、公開投票で優勝した作品「田舎女子高生」がミュージックビデオとして公開された

―松山さんの学年はどんな活動をしてきましたか

松山　実は自分たちはシムシティのゲームには触っていないんです。

先輩たちの代で決まった生駒高原を活性化させるという「映え増え栄え大作戦」をどう実現するかを考えて活動しました。

はじめは、どうすればいいのか全然わからなかった。でも、できれば自分たちが卒業するまでに何か形にして残したい、実現したいなと思いました。

―実際に活動してどう感じましたか

松山　小林に住んでいながら小林のことをぜんぜん知らなかったので、まずは小林について調べるところからのスタートでした。

現地視察などを通じて、自分たちの知らないことがまだまだあるんだろうな、面白いなと感じました。

―自分たちのアイデアを実現するためにクラウドファンディングで資金集めに挑戦しました

松山　機械科や農業科に協力してもらったこすモ～ビスケットや農業科オリジナルの乳酸飲料を返礼品にして、ふるさと納税制度を活用したクラウドファンディングに挑戦しました。

ただ、社会人の立場に立ってこの活動にお金が出せるかと考えたとき、自分の母校じゃない人は寄付する気にならないんじゃないかと不安に思いました。

―実際には目標を超える170万円の寄付が集まりました

松山　寄付の受付期間が半分過ぎたころは全然集まっていなくて、これは無理だなと（笑）

でも後半に一気にお金が集まった。目標金額を越えたときは正直にうれしかったですね。

自分たちの活動を応援してくれる人がたくさんいるんだと実感すると同時に、適当なことはできないとプレッシャーを感じました。

―2年目は、集まった寄付で日時計をつくるというところまで決まりました

松山　あと一年ほしかった。もう一年あれば自分たちの代で形にできたのにと思いました。

でも純粋に楽しい一年間でした。

今奈良　先輩たちからアイデアを受け継いだので、ちゃんとしたものを作らないといけないと責任を感じました。先輩たちも完成を楽しみにしているだろうと思って。

―今年は新型コロナウイルスの影響で休校期間がありました。活動が思うようにできなかったのでは

今奈良　本当なら2年生の3月から活動が始まるはずでした。それができなくなって、4・5月も学校が休校になった。

元々5月のポピーまつりにあわせて完成させる予定が、休校になっていつまでに何をすればいいかが分からなくなりました。

でも、学校がはじまって、9月のコスモスまつりまでには日時計を完成させることが決まったことで目標ができた。そこで気持ちが切り替わりました。

㊤1年目は8つの班に分かれ、さまざまな立場の人になりきってゲームで理想のまちをつくり、現実のまちと比較してアイデアをまとめた
㊦昨年10月に生駒高原で実施したイベントでは、VR（仮想現実）技術を使った遊覧体験やハーバリウム体験で来場者を歓迎。「準備が間に合わず、休日も準備したがそれも楽しかった」と松山さん

3年目は日時計のデザインを検討。手形でコスモスの花を表現した

―活動できる時間が短かったことで焦りはありませんでしたか

今奈良　9月になって台風が来たり、学校もコロナの影響でスケジュールがかわって中間テストが早まったり、雨が続いたり、自分たちが考えてきたことをいつ実行できるんだろうという不安の中での活動でした。

それでも、なんとしても完成させないといけない、勉強もちゃんとしないといけない。自分がどっちもやるしかないと思ってがんばりました。

―無事に展望台が完成し、9月には完成式典が開催されました。式典の日をどんな気持ちで迎えましたか

今奈良　先輩たちから託された想いが形になり、誇らしい気持ちでした。

子どもからお年寄りまで誰からも愛されるものになってほしいと感じました。

松山　自分はセレモニーを見に行きました。完成してる！これはすごいな！と展望台に登った瞬間に実感が湧きました。

―シムシティ課の活動を振り返ってどんな発見や変化がありましたか

永﨑　小林は人を大切にしているまちだと思います。

私は小林がすごく好き。将来自分が家族を持ったら絶対小林に住みたい。

離れた今だからこそ小林のよさが分かります。

松山　1年間活動して、小林にもこんないいところがあるんだと思ったり、逆に、小林の変えないといけないと思うところも見えたりしました。

（シムシティ課の活動で）東京に行ったことがあったんですが、東京から帰ってきたときに小林は落ち着くなと思いました。都会には楽しいけど、都会にはないものが小林にある。

今奈良　シムシティ課の活動で、小林や西諸についてすごく考えました。

これまでは小林についていいところも悪いところも含めて考えたことはなかった。

活動をとおして、今は小林といえば生駒高原を連想するようになりました。

―最後に、小林市が今後どんなまちになってほしいか教えてください

永﨑　私は「愛嬌のあるまち」「田舎らしくあるまち」になってほしいです。

小林を好きな人が増えて、かわいがられる、好かれるまちになってほしい。

人やモノが増えることも大切だけど、ただ増えるだけじゃなくて、今あるものを充実させていくことが大事なんじゃないかと思います。

松山　「活気があるまち」です。ただ活気があるだけではなくて、田舎の良さを残したままで活気のあるまちになってほしい。

永﨑　もちろん、都会のように遊ぶところはほしいです。でもそれは、学生が学校帰りにちょっと立ち寄れるくらいでいいんじゃないかな。

今奈良　私は「みんなが知っているまち」です。

卒業生の多くは一度は小林を離れます。市外に出たときにどこからきたのかと聞かれて、宮崎県の小林市ですと伝えたら「ああ！」といってもらえる、そんなまちになってほしい。

もし、生駒高原で小林を知ってもらえたら、私たちの活動も意味があったと思える気がします。

心にふるさとの種をまく―

高校生が真剣にふるさとを考え、大人たちもその取り組みにしっかりと向き合った結果、生駒高原に誕生した新しい名所「人間日時計展望台」。

しかし、展望台が完成したこと以上に、高校生がふるさとと真剣に向き合った時間こそが、本当に価値あるものなのかもしれません。

市内の高校を卒業した生徒たちの多くは、市外の大学や企業に進学・就職してふるさとを離れていきます。

大人になる一歩手前、立ち止まってふるさとのことを考え、話し合い、行動した経験は、きっと大きな財産として生徒たちの心に残りつづけるはずです。

心にふるさとの種をまく。5年、10年先の未来に、生徒たちの胸にふるさとを想う花が咲いていることを信じて。